



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	Pragmatic Teaching and Japanese EFL Learners' Use of Greeting Routines [an abstract of dissertation and a summary of dissertation review]
Author(s)	ZEFF, BERT BRICKLIN
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(国際広報メディア)
Dissertation Number	甲第13188号
Issue Date	2018-03-22
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/70646
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Bert_Bricklin_Zeff_review.pdf, 審査の要旨



学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（国際広報メディア） 氏名：ゼフ・ブリックリン

審査委員	主査 教授	河 合 靖
	副査 特任教授	上 田 雅 信
	副査 教授（神戸大学）	ティモシー・グリア

学位論文題名

Pragmatic Teaching and Japanese EFL Learners' Use of Greeting Routines

（語用論的指導と日本人 EFL 学習者の挨拶ルーティンの使用）

本論文では、語用論的指導を日本の大学生の英語教育に取り入れることで、学習者の英語による言語運用を向上させるか否かを検証している。挨拶をスピーチアクトとして取り上げ、語用論指導の教育介入を行ったグループとそうではないグループで学習者の認知と言語運用を比較している。著者は、日本の英語教育が長く語彙と文法の記憶・理解に焦点が置かれてきており、言語運用能力の育成が課題であったが、近年コミュニケーション重視の英語教育が文科省からも中学高校に要請されるようになってきていると指摘する。英語による伝達能力の育成には語用論的能力の発達が重要であるが、その指導をどのように教室に取り入れるかについては統一的な見解に至っているわけではないと著者はいう。先行研究では、明示的な語用論的指導の効果に関する知見が得られているが、取り上げられる語用論的要素や教育介入および言語運用能力評価の方法は限定的であると著者は主張する。

本研究では、（１）挨拶の明示的・非明示的な語用論的指導の効果、（２）挨拶の語用論的指導方法の開発、（３）模擬的自然場面での挨拶行為の語用論的評価方法の開発、の３つの研究課題を設けている。明示的教育介入グループ、非明示的教育介入グループ、教育介入を行わなかったグループの３群を設け、事前テスト、事後テスト、遅延テストを行い、分散分析により比較した。また、挨拶行為の必然性を生じるシナリオを考案して模擬的な現実場面では英語による挨拶の言語運用を学習者に行わせ、録画して評価した。その結果から、著者は次の知見を得たと主張する。まず、教育介入を行ったグループの一部に素点の上昇は見られたが統計的に有意な結果とならなかったため断定できなかった。しかし、学習者の挨拶行為を録画して評価した結果、著者がマイクロ・グリーティングと呼ぶ挨拶の最小単位で学習者間に違いが見られた。英語と日本語でこれを成立させる要件に違いがあり、これ

が日本人英語話者の挨拶に対する英語母語話者の違和感を引き起こしていると著者は主張する。

本論文について、研究成果の意義、方法論的貢献、教育への示唆の3点から審査した。その結果、審査委員は、次の点において本論文の意義を認める。1) 挨拶は外国語教育において必ず触れられる学習項目であるが、著者はこれを語用論的視点からとらえて指導する重要性を指摘し、日本人英語話者の挨拶行為における語用論的能力の発達上の問題の1つを、マイクロ・グリーティングという概念で具体的に指摘した。2) 日本人英語学習者に関する先行研究ではあまり実施されてこなかった実際の言語運用場面の分析を、模擬的現実場面の創造によって実現する方法を提示した。3) 上記2点により、挨拶の語用論的指導に具体的な示唆を与えた。

本論文の審査においては、以下の問題点が指摘された。第1点として、模擬的現実場面の創造を試みているが、完全な自然状態の発話を採集しているわけではないので、学習者の教室外の言語運用をそのまま反映しているかどうかは疑問である。第2点として、学習者の会話の分析に出現頻度の高い単語を文字の大きさや色で視覚化するプログラムを用いているが、本研究分野の学術研究での使用例が少なく、分析技法としての精度に疑問がある。第3点として、使用される用語や分析に語用論や会話分析それぞれの専門分野の視点から厳密さを欠くと思われる部分がある。1点目については、応用言語学では教室場面で自然状態を創造する際に限界が生じるが、挨拶行為を産出するうえでは可能な限りの設定を行っており、本研究の目的の範囲内で問題はないと判断した。2点目については、学術研究の分析技法としては疑問が残るが、パイロット・スタディで本調査へ向けて大まかな方向を探る過程で用いられており、結果の解釈もそれに応じたものとなっていると判断した。3点目については、本研究をそれぞれの専門分野の知見や概念、研究方法を目的に応じて統合した英語教育分野の応用言語学研究と位置づければ、研究全体として示唆する内容を解釈するうえで著しい瑕疵とはならないという判断に加え、本人のこれからの研究者としての研鑽により問題の解決は可能であると評価した。

以上、本学位論文の審査委員は、本論文が学術的意義を持つとともに英語教育に具体的な知見を提供し社会的な貢献も期待できると判断する。よって著者は、北海道大学博士（国際広報メディア）の学位を授与される資格があるものと認める。